

重要文化財安福寺石棺保存整備事業報告



1997年3月

柏原市教育委員会



安福寺石棺の覆屋（南東側から）



安福寺石棺の覆屋（北東側から）



安福寺石棺蓋（東側から）



安福寺石棺蓋（北東側から）



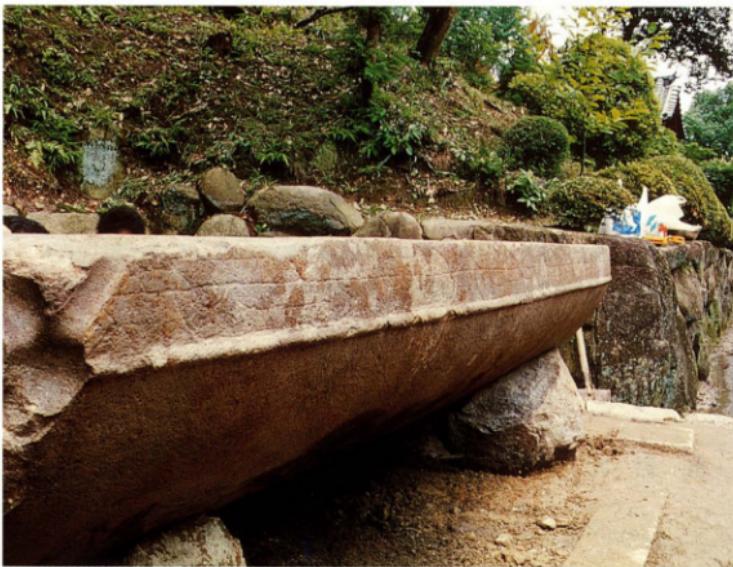
安福寺石棺蓋南側長側辺（頭部側）



安福寺石棺蓋北側短側辺（脚部側）



安福寺石棺蓋西側長側辺



安福寺石棺蓋東側長側辺

はしがき

玉手山丘陵は、生駒山地と金剛山脈との懷部にあたり大和川と石川が河内平野に流れ出る合流部付近を先端とした南北方向に連なる低丘陵です。この丘陵上には前方後円墳が多数連なり、中期の古市古墳群に先立つ前期の河内地域の古墳時代の政治動向を解きあかすための貴重な古墳群であります。

丘陵全体に急激な市街化が進み現在までに半数をこえる古墳が姿を消し、歴史的な環境が次第に薄れていますが、この石棺によって地域文化の先進性や歴史の堆積を垣間見ることができます。

当古墳群から出土した安福寺石棺蓋は、平成2年6月29日に重要文化財に指定された前期の古墳の埋葬施設に使用された石棺の蓋です。近畿地方では稀少な形態の割竹形石棺で、その下端の突帯に直弧文が施されている秀麗な特徴も有しています。

この石棺に埋葬された被葬者は誰なのか、四国の鷺の山石材をどのような経緯と流通から持ち運ばれてきたのか、直弧文が施された理由は何処にあるのでしょうか。近畿地方の歴史を紐解く古墳時代の政治動向や祭祀方法、人々の考え方等を探ることが出来る重要な鍵を握った石棺です。丘陵上にある玉手山3号墳から持ち運ばれてこの安福寺境内に置かれたものと推定されていますが、特定の古墳を断定していない大きな問題が残されています。河内名所団会の中には既に安福寺の境内に置かれた様子が描かれていますから約200年の年月が経っています。それ以後覆屋がある時期もありましたが、露天にさらされた環境も継続して石棺全体が次第に風化してきました。

この石棺を永く保存していくことは、私たちの責務として考え、石棺の保存対策事業としまして石材のクリーニングと補強の工事、雨露を防ぐための覆屋を建設しました。これまでの風化する速度をより鈍化させるものと考えます。

本保存対策事業に対して、所有者であります安福寺と文化庁文化財保護部、奈良国立文化財研究所、大阪府教育委員会文化財保護課からご理解とご協力、ご指導を頂きましたことを深く感謝致します。

平成9年3月

柏原市教育委員会

教育長 舟橋清光

はしがき

安福寺の所在地、玉手山は柏原市街を眼下に、遠く大阪平野部を広く眺めることができます。また、古代から近辺は交通の要所として栄えてきたこともあり、常に優れた文化が育まれてまいりました。そのため、長い歴史の中に自然と培われ、貯え続けられてきた文化財が多く点在しています。そして、安福寺にも多くの先人たちが遺した貴重な文化財が伝わっています。当寺を訪れる人々の中には、こうした文化財に直に触れてみようと、熱心に遠くからでもみえられることがしばしばあります。

当寺は大坂夏の陣の後50年を経た寛文年間に、珂愬上人が尾張徳川家2代・徳川光友公の菩提寺として再建されました。本尊は阿弥陀如来座像です。とくに本堂などの造りは屋根を低くし、柱を太くして風震災に耐えられるような設計が施されています。一部には「珂愬式建築」や「聖徳太子建築」などと呼ばれ、建築史に1つの様式をなすと言われています。

寺宝には当石棺をはじめとして、やはり光友公より寄進されました「菩提樹絵香炉」「牡丹絵硯箱」「山水絵硯箱」などがあり、国の重要文化財に指定されています。また、「安福寺横穴古墳群」は、大阪府から文化財としての史跡指定を受けています。なおこの石棺は、当寺再建当初から手水鉢として近年まで使用されていましたが、いつごろ現地に落ち着いたのかは分かっていません。ただ、当寺の全身となる寺院があったとされる所から発見され、移されたのだという説があるのにとどまっています。そこには、この石棺を埋納していた古墳があったのでしょう。もし、現地に運ばれてきた時期や経緯が分かれば、当寺自体の歴史もさらに明らかになってくるのではないかと思います。石棺本来の姿についていかなる認識が持たれていたかということは今となっては分かりませんが、いずれにせよ、これに代わる手水鉢が、もしあったなら、この石棺の現存は危うかったかも知れません。歴史ロマンに満ちた石棺がここにあるといえるでしょう。

私達は、当寺に伝えられている寺宝を後世に遺して行きたいと強く感じています。これまでがそうだったように、地域文化の発展につながる布石となるよう、かけがえのない文化財を保存して行きたいと考えています。

今回、文化庁・奈良国立文化財研究所・大阪府教育委員会・柏原市教育委員会からは、当寺の事情や背景にご配慮下さりながら、石棺の保存処理と覆屋の建設ができましたことをここに感謝を致します。

合掌

平成9年3月

安福寺

住職 大崎信有

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が柏原市玉手町安福寺所有の重要文化財割竹形石棺の文化財保存事業を実施した整備調査報告書である。
2. 整備は、安福寺の保存申請に基づき、国庫補助事業として総額12,300,000円を費やして実施した。
3. 石棺保存事業実施は、平成5年6月15日から同年7月30日まで実施し、覆屋の建築は、平成5年9月1日から同年12月24日まで実施した。
4. 本整備事業の事務担当は文化係山田寛顯、整備の実施について北野　重が担当した。
5. 本書の編集、執筆、製図、写真は北野が担当した。
6. 調査の実施は、文化庁文化財保護部美術工芸課林　温、土肥　孝、奈良国立文化財研究所沢田正昭、大阪府教育委員会文化財保護課田中和弘、久米雅雄各氏から助言と指導を賜った。記して謝意を表したい。
7. 保存処理の施行は奈良国立文化財研究所の指導のもと株式会社近畿ウレタン工事、建築は、株式会社金剛組が実施した。また、施行に際して、株式会社近畿ウレタン工事林　政行、株式会社金剛組　梁瀬一宏両氏には多大のご協力を頂いた。記して謝意を表したい。
8. 整備事業と本書作成に多くの方々の参加と協力を頂いた。

松井隆彦	藤田昌宏	米田 博	竹下 賢	空山 茂
橋谷和夫	山田寛顯	長西茂樹	安村俊史	石田成年
寺川 欽	生駒美洋子	阪口文子	楳原美智子	松尾洋平
山口 勝	西島伸彦	奥野 清	谷口鉄治	

目 次

第1章 整備事業の経緯	1
第2章 位置と環境	3
第3章 石棺の保存整備	5
第4章 石棺の覆屋の建築	7
第5章 まとめ	11

挿 図 目 次

図-1 玉手山3号墳にて (1990. 1. 29)	図-5 覆屋建築作業
図-2 周辺の遺跡	図-6 安福寺削竹形石棺蓋覆屋設計図
図-3 安福寺横穴群	図-7 安福寺位置図
図-4 石材強化作業	図-8 直弧文の単位

図 版 目 次

卷頭図版1 安福寺石棺の覆屋 (南東側から)	安福寺石棺の覆屋 (北東側から)
卷頭図版2 安福寺石棺蓋 (東側から)	安福寺石棺蓋 (北東側から)
卷頭図版3 安福寺石棺蓋南側短側辺 (頭部側)	安福寺石棺蓋北側短側辺 (脚部側)
卷頭図版4 安福寺石棺蓋西側長側辺	安福寺石棺蓋東側長側辺
図版-1 玉手山北側丘陵航空写真 (東側から)	安福寺主要建物航空写真 (北西側から)
図版-2 石棺の現状	石棺の現状
図版-3 石棺の現状	石棺の現状
図版-4 専門委員の視察	専門委員の視察
図版-5 苔や地衣類、土壌等の水洗い	苔や地衣類、土壌等の水洗い
図版-6 樹脂湿布作業	樹脂湿布作業
図版-7 O H水溶液の浸透作業	O H水溶液の浸透作業 洗い
図版-8 O H水溶液の浸透作業	O H水溶液の噴射作業
図版-9 石棺の移動	石棺の移動
図版-10 石棺の移動	石棺の移動
図版-11 石棺保存作業完了	石棺保存作業完了
図版-12 覆屋の礎石敷設	覆屋の礎石敷設
図版-13 覆屋の建築斗骨部分	覆屋の建築棟持部分
図版-14 覆屋の建築鋼版張り	覆屋の建築鋼版張り
図版-15 覆屋の建築遮子構	覆屋の完成披露
図版-16 石棺蓋の実測図	

第1章 整備事業の経緯

柏原市玉手町の安福寺境内に所在する割竹形石棺は、覆屋がなく風化が進行していることは、早くから警鐘されていた。凝灰岩というとりわけ軟質の石材であり、苔や黒い増殖し、製作時の細かい調整や突端に記された直弧文の線刻が次第に薄れてきた。また、石棺天井部（現在の座位では下部にある）の一部が表面剥離が進行している。

重要文化財として指定（平成2年6月29日）を受け、文化庁保護委員会においてこの石棺の保存について協議がなされた。その結果をうけて、平成2年7月30日文化庁三輪嘉六、保護委員樺崎彰一、奈良国立文化財研究所田中 卓、大阪府教育委員会田中和弘の各氏が現地視察に来られた。現地では、所有者安福寺住職大崎信宥、柏原市教育委員会社会教育課松井隆彦、竹下 賢、山田寛顕、北野 重が立会協議を実施した。この協議において、石棺の保存に対する必要が確認され、それぞれが実務において前向きの検討を行うことになった。

その後、実施時期と経費接分、保存方法等について、文化庁、奈良国立文化財研究所、大阪府教育委員会の指導のもと安福寺と柏原市教育委員会が実施内容について協議を実施した。当初、平成4年度に石棺の保存補助事業を行い、次年度に覆屋を建築する計画を描いていた。しかし、国庫補助予算の関係から翌年度実施と内容の一部変更があり、事業期間を2年間とせず1年間とし、石棺の保存と覆屋の建設を単年度に実施する運びとなった。

保存の方法については、石棺のクリーニングと覆屋の建設を主体とする計画が話し合われた。割竹形石棺の蓋であるという認識から現在とは逆位の設置が議題に上ったが、永く安福寺境内の一象徴として馴染んでおり、現代の状態で変更しないとの結論に達した。

石棺のクリーニングについては、当地から石棺を持ち出し設備等が整っている工場で処理する方法が話し合われたが、当地から運び出す交通手段である幅広い道路がなく難航することが考えられるので、現地において対応するようになった。方法については、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室沢田正昭室長の指導を受けることとなった。実施は平成5年6月15日から同年7月30日まで実施した。石棺の覆屋は、寺院関連建築を手懸けている株式会社金剛組が平成5年9月1日から同年12月24日まで実施した。建築規模等の構造が現在の石棺の位置と排水溝との間隔が狭く不都合となるので、保存処理作業時に山手側から手前参道に少し移動した後行った。

平成5年7、11月文化庁から土肥 孝、林 溫両氏が石棺の保存処理及び覆屋建築作業中の様子を視察に来られた。



図一 玉手山3号墳にて(1990.1.29)

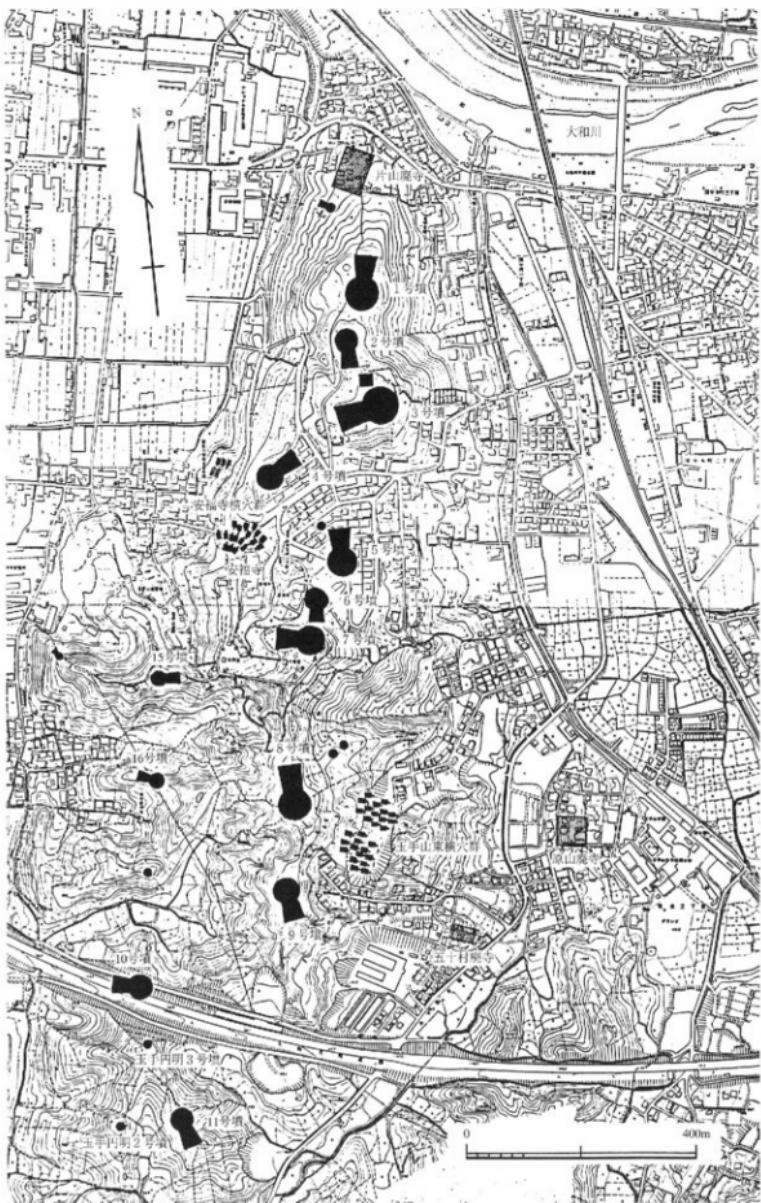


図-2 周辺の遺跡

第2章 位置と環境

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県との境に連なる生駒山地・金剛山脈の麓にあり、広ぼう東西方向6.60Km、南北方向6.63Km、面積24.77Km²を測る府下19番目の小都市である。

玉手山丘陵は、金剛山地北側にある二上山系から北西部に伸びた低丘陵である。丘陵の北側には奈良県側から亀の瀬峡谷を潜り出る大和川が主流河川として流れ、丘陵の西側を石川と東側を原川が北流して大和川と合流し、河内平野の集落遺跡群に水資源を供給している。

ここで、調査が実施された古墳や近年調査によって発見した所見を加えて位置と環境の概要を説明したい。

河内地域の山系の地質は、2千万年前に活動していた二上山を中心として周辺部に火山性の山塊を造っている。そして、二上山山塊から産出するサヌカイトが旧石器時代以降から弥生時代にかけての石器石材として使用されて、近畿地方の石器主要産出地として石材の流通が盛況に行われたと推察される¹⁾。石材を媒体とした物的・人的交流が、当地域と周辺地域との集落間を結ぶ幹線道路を誕生させ、大和川や石川を利用した水運も含めて主要交通手段の一つとして定着していったと考えられる。

また、大和川や石川の東側に立地する羽曳野丘陵上の国府遺跡²⁾やはざみ山遺跡³⁾、翠兆園遺跡⁴⁾では住居や石器加工工房を持つ遺跡が発見されているが、柏原市内の遺跡から有舌尖頭器や国府型ナifers等の石製品が散在的に採集されているのみで生活痕に関する遺構の発見はない。

玉手山丘陵は、旧石器時代の石器が散逸的ではあるが⁵⁾、主にその北側地区から出土及び発見がある。四周全体のかなり広い範囲を鳥瞰出来る立地にあり、政治的な戦略と防衛的な見地から要衝の地として重要性を帯び、石材収集を始めとして、動植物の狩猟や採集に適した場所であり、農耕に必要な水利の管理を行える拠点でもある。この丘陵上で生活を営むことも可能な秀でた場所と云える。

縄文時代の集落跡は発見されていないが、丘陵裾部の玉手中学校内の調査から土偶が1点出土⁶⁾しており、今後周辺部から発見される可能性は高い。

弥生時代は、片山廃寺西側斜面部に多数の土器散布があり、丘陵上の古墳群の下層や周辺部から土器類の出土がある。玉手山6号墳周辺において弥生時代の堅穴住居を検出し、土器と共に銅鏡が出土している⁷⁾。また、7号墳南側から堅穴住居が検出されており、土器と鉄鏡が出土している⁸⁾。玉手山9号墳からも土器の散布がある。これらの事例から、丘陵の頂上部の平坦な場所や緩斜面地に集落が営まれていたことが考えられる。

古墳時代、河内地域で最初に築造された前方後円墳はどうの古墳であるかは解っていない。しかし、幾つかの古墳が



図-3 安福寺横穴群

候補となっている中に玉手山丘陵上の古墳が数基入っている¹⁰。その被葬者は、自己の支配地域である幾つかの集落や農耕地域を鳥瞰しうる場所へ前方後円墳を築造した。玉手山丘陵には河内地域の初源期の首長層の墓域が累々と継続して築造していくのである。玉手山丘陵より奥まった場所に松岳山古墳群、更に大和川の対岸に位置する生駒山地南西部丘陵部に安堂古墳群等に前期の古墳が築造されておりそれぞれ関連性を有している。玉手山丘陵上の古墳群に葬られた集団は、丘陵の主要な場所を前方後円墳で占拠した以後新たな古墳の築造場所を求めたのが古市古墳群のある羽曳野丘陵であろう。

近年、これらの前方後円墳の周辺部に小規模な古墳が数基発見されている。例えば、1号墳の北側にある片山庵寺の周辺部に中期の埴輪を持つ古墳の痕跡が幾つか発見されている。片山庵寺の寺院造成による破壊もあり、その後の開発によっても削り採られ全容は明確でないが、少なくとも4基以上の古墳が存在したことが確認されている¹¹。3号墳の周辺部には後期の小石室墳¹²、木棺直葬墳が2基以上あり¹³、群集する可能性が高い。4号墳の西麓部には安福寺横穴群と丘陵南側には¹⁴玉手山東横穴群が前期の古墳が連なる丘陵裾部に見られる。高井田横穴と比較して小規模であるが、それぞれに異なる横穴築造手法が見られることから異なる渡来系集団の墓域と考えられる。安福寺横穴群は、騎馬人物の線刻壁画が著名であり、陶棺が出土する横穴や円筒棺墓も検出されている¹⁵。

飛鳥時代から奈良時代にかけて、周辺には数多くの古代寺院が建立され、丘陵北側先端に片山庵寺、玉手庵寺、丘陵東側には原山庵寺、五十村庵寺、南側には円明庵寺がある。更に大和川の上流には田辺庵寺、河内国分寺、国分尼寺、東条尾平庵寺等があり、河内の古代寺院の密集地である¹⁶。当時の政権を司る勢力に近い主要な氏族が蟠據していたと考えられる。その時期の墓域は、玉手山3号墳西側の緩斜面地と、玉手山東横穴群の東側斜面地にそれぞれ火葬墓群が横穴群近辺に造墓される。

参考文献

1. 「ふたがみ」 同志社大学旧石器文化談話会 学生社 1974
2. 「國府遺跡遺跡の謎を解く」 藤井寺市教育委員会 1996
3. 「はざみ山遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1986
4. 「舉光園遺跡」 羽曳野市史第3巻資料編1 羽曳野市 1994
5. 桑野・李他『柏原市出土のナイフ形石器・有茎尖頭器』柏原市立歴史資料館報創刊号 1990
6. 山本昭「古代の柏原」「柏原市史」第二巻 1973
7. 「玉手山遺跡」 柏原市文化財概報1984-VII 1985
8. 6と同じ
9. 「玉手山遺跡」 柏原市文化財概報1993-I 1993
10. 「前方後円墳集成」近畿編 山川出版社 1992
11. 「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」 柏原市教育委員会 1982
「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」 柏原市文化財報告 1982-II
12. 「柏原市埋蔵文化財発掘調査概要報告」 柏原市文化財概報 1980
13. 「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」 柏原市文化財概報 1989-I 1990
14. 「玉手山遺跡」 柏原市文化財概報1986-VII 1987
15. 6と同じ

第3章 石棺の保存整備

石棺蓋は、現在安福寺境内の参道の一画に野ざらしの状態で置かれている。少し以前には簡素な覆屋があったのであるが、露天に曝されて表面の剥離が非常に激しく石棺蓋全体の保存に影響を与えている。保存修理内容は次のとおりである。

1. 安福寺割竹形石棺蓋保存修理工事内容の概要

イ. 所在地

柏原市東手町 7番21号

ロ. 規模 法量 長2.56m 幅0.90~0.80m

高0.47~0.43m

ア. 直接工事費

イ. 使用機械等損料

ウ. 消耗品費

エ. 搬入（搬出）費

エ. 諸経費

オ. 事務費

奈良国立文化財研究所遺物処理室の沢田先生に相談し、次のような内容に留意するようにとの指導を賜った。

石造の文化財は年月を経るとともに劣化していく。石造文化財が劣化する速さは、その文化財に使われている石材の性質や石造文化財が置かれている状況等によって異なっている。すなわちサスカイトと呼ばれる石のように強い石材で製作されたものは長持ちし、凝灰岩のように弱い石材で製作されたものは劣化が激しいということになり、また空調機能のついた保管ケースに入れられるものと直接風雨にさらされ、苔や地衣類、土壌等におおわれたままになったものとでは、当然劣化の進行速度は違ったものとなる。石造文化財の劣化を防ぎ、長く保管していくためには、その文化財に使われている石材の性質を改質することとその文化財が置かれている環境を改善し、石材に作用し、劣化を促進させる原因を排除することが必要になってくる。

石棺蓋の保存処理は、まず第1に表面についた苔や地衣類、土壌等をEDTAと呼ぶクリーニング剤の水溶液を高吸収性の樹脂にしみこませて湿布することによって除去する（クリーニング）ことから開始する。次に石棺蓋の表面で剥離しかかっている部分を特殊な（変性ウレタン系）接着剤を用いて剥離が広がらないように仮止めをする。次に石材の強化剤として特殊な樹脂を割竹形石棺蓋全体に吹き付け、仮強化を行う。吹付方式による仮強化のままでは表面上の強化しか得られないため、最後に吹付方式で用いた強化剤と同じ強化剤を点滴方式により割竹形石棺の蓋の内部全体に浸透させ石材の改質を行う。

実施内容の概要は、次の3点に要約される。

第1点目は、苔や地衣類の除去するクリーニング作業である。苔や地衣類を物理的に除去することで水洗いと薬品によって取り除く作業を実施した。この作業は、石棺の表面を磨研する作業があるので、慎重に実施する必要があり、苔や地衣類が多い部分は、特に時間を費やして丁寧に行う。

第2点目は、剥離部分の接着、隙間の充填である。空洞化した部分に変性ウレタン系接着剤を使用し充填剤としてエポキシ系成分樹脂を使用する。

第3点目は、石棺の石材に強化することである。石材の補強と剥離部分の接着と充填である。石材の補強には、OH水溶液にて浸透をさせる作業である。石材をビニールで包み乾燥機を中心に入れよく乾燥させた後均等に水溶液を浸透させる作業を行う。

現在の状態を元に戻すことは不可能であるので、現状から更に進行しないように食い止める方策を講じなければならない。少し以前の石棺の状態を知見している人ならば、近年の石棺の変化には些かの危惧がかかるのではないか。特に、天井部から突端の方にかけて黒や苔が蔓延り、天井部の表面が数mmの厚さで剥離し、しだいに広がる様相を呈していた。つまり、黒や苔が増殖した場所は水分を保つようになり、夏期には渥乾が繰り返され、冬期には凍結し霜柱状態で剥離が進行し始めたものと考えられる。

石棺全体に黒や苔の除去するクリーニングを実施するため一時石棺を持ち上げ、覆屋の設計図を描いた後その中心部分への移動を行った。また、石棺を持ち上げた時に土台の2石を移動し、石棺との接点に隙間があったので部分的に荷重がかからないようにコンクリートを補充した。

保存処理は、平成5年6月15日から開始し、同年7月30日に完了した。



図-4 石材強化作業

第4章 石棺の覆屋の建築

割竹形石棺の覆屋の建築物は、石棺の保存環境の改善を目的とし、平成5年9月1日から同年12月24日まで次のような概要で実施した。

1. 建造物の概要

イ. 所在地

柏原市玉手町7番21号

ロ. 構造形式 覆屋、切妻造り 銅版葺

ハ. 主要寸法

軒 高 2.580m 棟 高 3.940m

建築面積 6.435m² 延床面積 5.445m²

2. 支出概要

イ. 建築主体工事

- a. 仮設工事
- b. 解体工事
- c. 基礎工事
- d. 木工事
- e. 屋根工事
- f. 雜工事
- g. 自動火災報知設備工事

ロ. 事務費

ハ. 消費税

各工事（a～g）の内訳は、次のとおりである。

a. 仮設工事

水盛造方	現寸型板（墨出し）	軒廻り足場
柵足場	足場手摺	登り棧橋
各所養生費（石棺共）	片付け整理費（残材処分共）	運搬費（小運搬共）

b. 解体工事

既存磯石撤去（場外処分）	既存地覆石撤去（場外処分）
--------------	---------------



図-5 覆屋建築作業

c. 基礎工事

柱下礎石（花崗岩荒措仕上250×280×150mm）	柱上・下独立基礎（鉄筋コンクリート裏石共400×400mm）
地盤石（花崗岩荒措仕上150×100mm下地跡石モルタル共）	縁石（下地碎石モルタル共120×120mm）

d. 木工事

桧（小節）	杉（1ト）	大工手間
大工手元	彫刻費（鬼板）	彫刻費（頭貫鼻）
彫刻費（板模版）	彫刻費（懸魚六葉）	加工材運搬費

e. 屋根工事

銅板一文字葺（厚0.35六ツ切下葺きルーフィング22kg共）	軒付銅板葺（下葺き5段）
箕甲銅板葺（下葺き5段）	棟胴板葺（下葺き5段）
鬼鳥衾胴板打出（厚0.5mm650×300mm）	運搬雑費

f. 雜工事

木部洗い美装	片開戸（桧小節400×1350mm丁番内張板共）	木部古色塗（木口塗共）
逃子櫻（桧小節）	洋釘及び金物	周辺整地（碎石敷き）

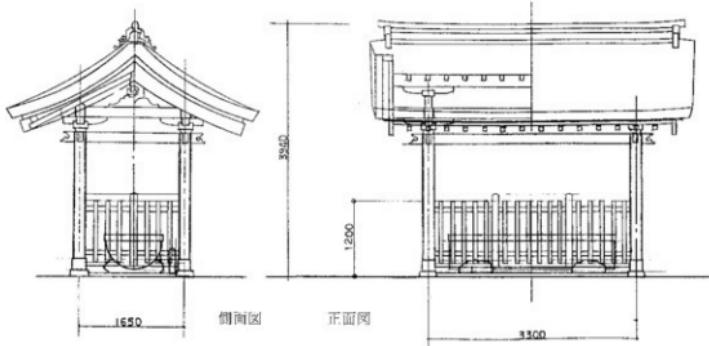
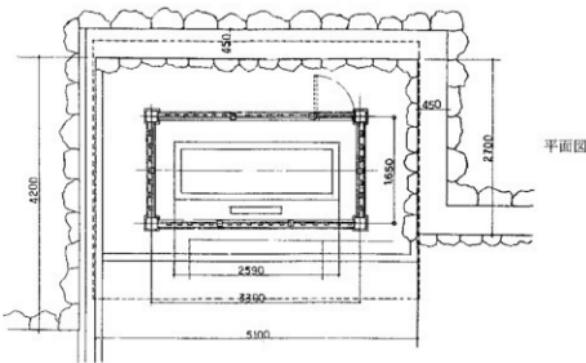
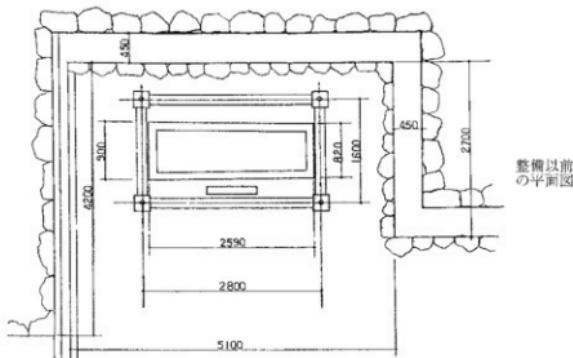


図-6 安福寺割竹形石棺蓋覆屋設計図



図-7 安福寺位置図

第5章 ま と め

古墳時代前期の古墳に關わる事物に少なからず直弧文なる模様が線刻されている。この直弧文は、当時の人々が幾つかの定義や法則を以て描いたことが考えられ、単なる模様の一つとして描いたものでない。また、古墳の内部主体である石棺や石障、鹿角製刀装具、器財埴輪等にみられ、葬送儀礼の中にその性格があるように受け取られているが、完全に説き明かされていない。模様構成の中に大きく2つの基本图形が存在していると認められており、直弧文を施した事物全体に基づき構成として及んでいる。直弧文の意味合いを万人が認める説として説き明かす人物は、直弧文の持つ背景や現象を推測できる文化系人物なのか、或いはその方程式を説き明かすことができる理科系の人物であろうか。石棺の口縁端部に施文されている直弧文を実測する機会をえたので、簡単な图形構成の原単位を抽出してその概要を述べ今後の研究の布石としたい。

本石棺に施文されている直弧文は、正当の直弧文としての認識は持たれているが、他の多くの直弧文とは趣きが異なり別系統の祖型と考えられている単純精緻な完成度の高い图形である。石棺の長側辺の模様は、口縁部端部から突線までの幅約10.0cm、長さ253cmに区画される長方形突帯の中に施文されている。対峙する反対側の面との模様構成は、上下方向に逆転している。また、模様の基準となる出発点は、両面とも横幅が狭い小口部から幅が広い小口の方へ連続しているように考える。基本単位は、1単位がどの部分を終始線とするか困難であるが、概ね同一图形で構成する6区分の中の1単位が基本単位となる。突帯の長辺を中央部で上下に区切る線を半裁線と名称すると、基本単位内に上下で描かれ近接した半円の中間点で180度回転すると上下の图形が同一图形となる。基本単位の構成は、半裁線である横方向の直線を中心軸線（以下軸線とする）として、基本単位の基準点が突帯幅の半分の長さを直径とする軸線上の半円が起点となり、上下の图形を繋ぐ始点となっている。つまり、半円の一端は、軸線から弧線を描いて折り返し、軸線と平行して半円から円弧を描いた線まで横方向に伸びる。また、他端は、軸線を突っ切り円弧を描きながら突帯端部に接するか接しない場合は突帯端部に対して垂直に繋いでいる。他端からはもう1本の斜め方向に伸びた直線が突帯端部方向に伸び、途中から帶を表出するように円弧を描く。半円の外周に二重の円弧が描かれ、外側の内弧の中程で次の基本単位とを直線で結び付けている。半円の一端から跳ね返って円弧を描きながら軸線に平行する線は、途中で軸線に垂直線が平行して2本、突帯端部に垂直して1本の直線が入れられる。これらの直線と半円の一端から斜め方向に伸びる直線は、各基本単位图形の中ではしばしば省略される。半円を外周する内側の内弧は、斜めの直線と軸線との間は省略されるのが基本であるが、省略せずに続けた場合と斜めの直線がない場合の2つの省略傾向が見られる。

图形の単位について検証すると、手の平を単位とした可能性がある。手の平を狭い小口部端の垂直線から区分した後、手の平を一杯広げた間隔で区分する。つまり、一つの基本単位の半円の一端から隣接する次の基本単位の半円の一端までが手の平サイズとなる。この手の平間隔は、ほほ



図一八 直弧文の単位

同数値もあるが1割前後の数値誤差が認められ平均すると20.6cmを測る。また、半円から軸線の反対側にある半円までの間隔は、平均15.3cmを測る。これは、口縁部の厚さと近似した数値である。以上の数値が直弧文の基本的な尺度として使用した可能性がある。

削竹形石棺は、削竹形木棺を祖形¹にしたと考えられ、石材の取り扱い技術の発展に伴い腐朽性と耐蝕性を持つ石棺の使用が次第に増加したと云える。古墳時代初期の石棺は、地域や古墳の被葬者の身分や階層性によって石棺の形式も異なっている²。種類としては、長持形石棺は天王や大和政権に近い支配者層に用いられ、削竹形石棺は香川県を中心として地域の首長層に用いられ、鷲の山で産出する石英質凝灰岩を用いたものが多い³。

この他に石棺の種類としては、舟形石棺と箱式石棺、家形石棺がある。舟形石棺は、削竹形石棺の形状に断面形が上下に平らになったり、蓋の短辺に傾斜面を持たせたりしたものという。しかし、近年削竹形とは同じ系譜の中で考えられるようになっている。箱式石棺は、弥生時代以来の系譜をひき、古墳時代を通じて行われた。一般的に小形の古墳に用いられることが多い。家形石棺は、蓋の頂部に平坦面、その四方に傾斜面を作つて屋根形にし、身を削り抜きまたは組合せにした石棺であり、畿内で中期末に出現し後期に盛行する。

これまで玉手山古墳群内で内部主体が明らかになっている前期古墳は、玉手山1、4、5、6、9、10号墳⁴がある。粘土桶を持つ古墳は、1、4、5、10号墳があり、竪穴式石室は、(1)、(3)、5、6、(7)、9、10号墳がある。東ワカ山古墳は、横穴式石室で玄室中央に6個の繩掛突起を有する組合せ家形石棺がある。

このように玉手山古墳群内の前期古墳は、粘土桶と竪穴式石室が用いられ石棺の出土例がなく、安福寺石棺が唯一の石棺となる可能性がある。玉手山古墳群は、削竹形石棺を始めとして長持形石棺等がなく継続して石棺を用いた形跡が少ないのでどのように理解すればよいであろう。石棺を使用する古墳を各地域の古墳で概観すれば、有力な首長層であったと考えて大過ないのであるが、玉手山古墳群は石棺を埋納する有力な首長の古墳群でなかったのか。また、石棺を慣行する時期まで至らず古墳群の築造が終焉したのであろうか。

安福寺の削竹形石棺は、玉手山古墳群の中で前期に限り唯一の石棺が発見されている事例である（後期の家形石棺や組合せ石棺、造付け石棺は存在している）。石棺形態から削竹形石棺でも古い形式⁵に編年されているが、石棺の時期決定には実際の埋納古墳がどの古墳であるか明確にする必要がある。また、鷲の山産の凝灰岩を使用した石材は、近在の松岳山古墳の長持形石棺の祖型と考えられる石棺部分材としてみることができる。この古墳は、墳丘は、扁平な安山岩で覆い積石塚様に築造し、内部主体に竪穴式石室を持ち、石棺がその中央部一杯に納められている。安福寺石棺と形式は異なるものの同石材を使用する時期や系譜の面から強い関連性が見られる。

ここで、玉手山古墳群の古墳内容の概略を述べておきたい。

玉手山1号墳は、丘陵最北部に位置する全長110mを測る前方後円墳である。過去に5回の確認調査例があるが、内部主体は、前方部から粘土桶の一部を確認⁶しているのみで後円部は現在墓地として利用されており、詳細は不明である。後円部第2テラスには安山岩板石を垂直積みし、白色

礫の散布が見られる。前方部第3テラスの外側から椿円形埴輪を用いた円筒棺が検出¹⁰されている。

2号墳は、全長70mの前方後円墳である。全体が墓地として利用されており、よくその全景が遺存していものの詳細は不明である。

3号墳（勝負山古墳）は、安福寺石棺が出土したと云われる全長106mの前方後円墳である。7号墳と同じく西側へ前方部を向けている。後円部の内部主体は竪穴式石室と粘土椁が想定¹¹されている。

4号墳は、全長約50mの前方後円墳である。後円部内部主体は粘土椁である。硬玉勾玉、鉄劍、鐵鎌、銅鎌、直弧文を配した楯・鞍が副葬品として出土している。全壙¹²。

5号墳は、全長75mの前方後円墳である。後円部に竪穴式石室と粘土椁があり、前方部に2基の粘土椁がある。出土遺物は、碧玉製錐形石、鉄鎌、銅鎌、巴形銅器、鎌、斧、金（後円部）、紡錘車、鉄劍、鉄刀、工具等がある。全壙¹³。

6号墳は、全長69mの前方後円墳である。後円部に2基の竪穴式石室があり、内行花文鏡、硬玉勾玉、碧玉管玉、滑石勾玉、鉄刀、銅鎌、斧、たがね（鑿）半円方格帯環状乳神獸鏡、碧玉管玉、鉄劍、鉄刀、鉄鎌、銅鎌、小札、刀子、斧、土師器壺が出土している。全壙¹⁴。

7号墳（後山古墳）は、全長150mの前方後円墳である。出土遺物に滑石合子がある¹⁵。

8号墳（東山古墳）は、全長約80mの前方後円墳である。東半部は土砂採集によって削られ、西半部は地滑りのため墳形をほとんどとどめていない。後円部の主体部は遺存している可能性が高い¹⁶。

9号墳は、前方部先端と東半部が土砂採集によって削られており、遺存している全長65mの前方後円墳である。後円部に竪穴式石室があるがほとんど盜掘によって破壊されている。出土遺物は、鉄劍先、小型丸底壺がある¹⁷。

10号墳（北玉山古墳）は、全長51mの前方後円墳である。後円部に竪穴式石室、前方部に粘土椁がある。出土遺物は、硬玉勾玉、碧玉管玉、滑石勾玉、鉄劍、鉄刀、鉄鎌、銅鎌、鏡、鎌、斧、土師器壺（前方部）、探文鏡、鉄劍、鉄鎌（前方部）がある¹⁸。

14号墳は、詳細は不明であるが、前方後円墳である。

15号墳（西山古墳）は、円墳で南面する後円部に竪穴式石室が遺存し、木棺の一部と玉類、鉄片などが出土した¹⁹。

東ワカ山古墳は、5号墳の前方部正面に隣接する丘陵の突端に位置する円墳である。横穴式石室で玄室中央に6個の繩掛突起を有する組合家形石棺があり、石棺の周囲に土師器、渓道に壺形の土師器数個、排水溝には円筒形の数本の土製品を連接して並べていた²⁰。

玉手山古墳群の行政区分けは、柏原市片山、玉手町、旭ヶ丘、円明町、羽曳野市駒が谷がその範囲に入っている。その中で古墳の分布密度において幾つかの単位を見出している。羽曳野市域の古墳を除去することも検討されているが、調査を実施した内容の検討から古墳が分布する地理的な位置からも幾つかのグループに分けられる。玉手山古墳群の検討は、河内地域の古墳時代の始まりを明確にできる重要な鍵を握った古墳群である。中期に属する古市古墳群との関連も当古墳群の性格を明らかにする前提があることが明確である。

参考文献

1. 小林行雄「直弧文」「古墳文化論考」平凡社 1975
2. 伊藤玄二「直弧文の分類について」「考古学雑誌」53-1 1987
3. 坪井清足「巨石芸術の世紀」「日本原始美術大系」6 1977
4. 小林行雄・近藤義郎「古墳の変遷」「世界考古学体系3」平凡社 1954
5. 和田晴音「大王の棺」「日暮陵古墳」平成8年度春季特別展 大阪府立近つ飛鳥博物館1996
6. (財)古代学協会四国支部第6回大会発表資料「剣拔式石棺研究の現状と課題」 1992
7. 「前方後円墳集成」近畿編 近藤義郎編 山川出版社 1990
8. 真壁忠彦他「墳丘と内部構造」「古墳時代の研究7」 1992
9. 桑野一幸「玉手山1号墳前方部の調査」「柏原市歴史資料館館報」創刊号 1990
10. 石川成年「玉手山1号墳範囲確認調査概報」柏原市教育委員会 1988
11. 安村俊史「玉手山3号墳」柏原市教育委員会 1990
12. 山本昭「古代の柏原」「柏原市史」第二巻 1973
13. 12に同じ
14. 村津弘明「玉手山古墳調査概報」「史泉」20・21 1960
15. 白神典之「玉手山7号墳採集の石製盒子」「史泉」56 1981
16. 安村俊史「玉手山8号墳」柏原市教育委員会 1987
17. 安村俊史「玉手山9号墳」柏原市教育委員会 1984
18. 大阪府教育委員会「北玉山古墳の調査」「大阪府の文化財」 1962
19. 「北玉山前方後円墳発掘調査概報」大阪府教育委員会 1966
20. 12に同じ

付 記

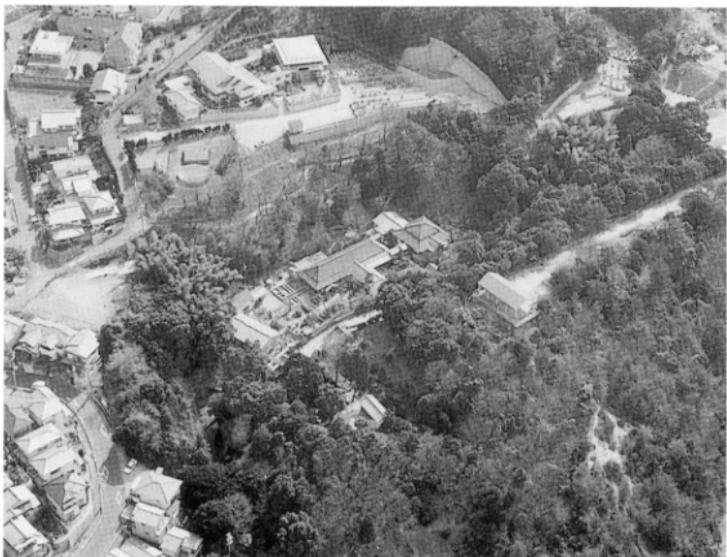
原稿の脱稿後、当石棺の口縁部平坦面に多くの穴が散在している事例を集めて出版している単行本を住職大崎さんにご教示頂いた。そのくぼみは、盃状穴又は石盆と名称し、古代人が生産・豊饒・安産を祈願した祝術的な信仰に基づき、近世になると宗教も系統化し、信仰も多様化して目的も変化していく。当石棺の石盆もその安産祈願の痕跡とも見受けられる。

辻川季三郎「石をも孕む江戸時代の泉州安産信仰」－その分布と系譜－ 1995

図 版



玉手山北側丘陵航空写真（東側から）



安福寺主要建物航空写真（北西側から）

図版二
石棺の現状

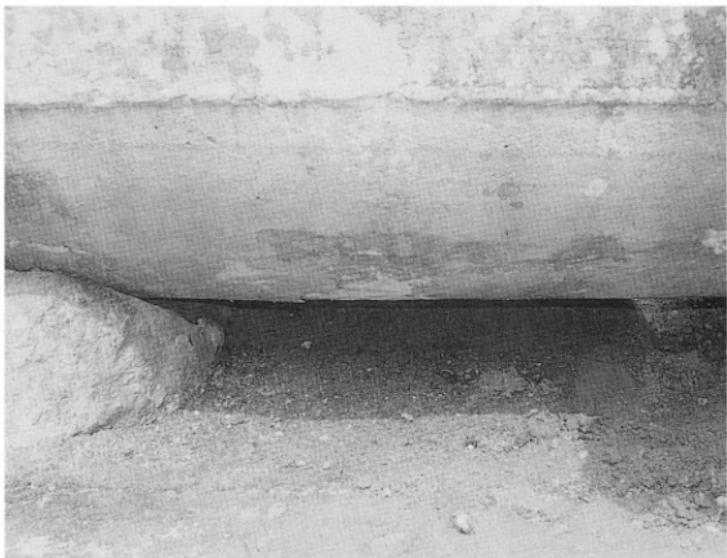


石棺の現状



石棺の現状

図版三 石棺の現状



石棺の現状



石棺の現状

図版四

専門委員の視察



専門委員の視察



専門委員の視察



苔や地衣類、土壌の水洗い



苔や地衣類、土壌の水洗い

図版六 石棺の保存整備



樹脂湿布作業



樹脂湿布作業

図版七 石棺の保存整備



O H水溶液の浸透作業



O H水溶液の浸透作業

図版八 石棺の保存整備

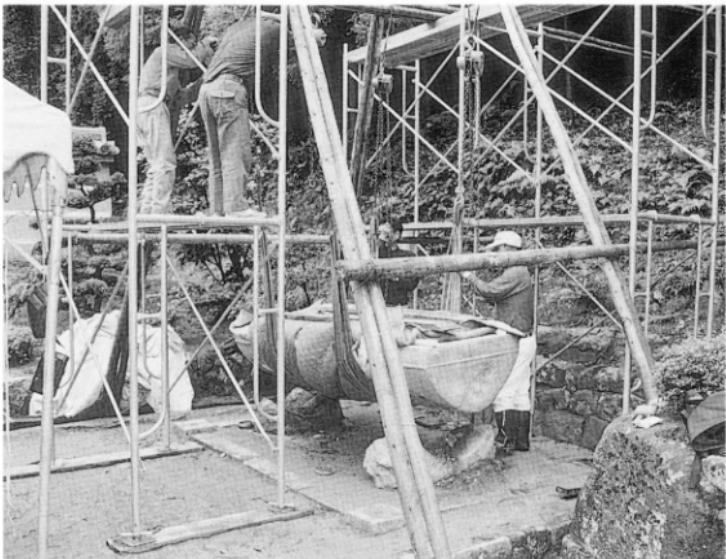


O H水溶液の浸透作業



O H水溶液の噴射作業

図版九 石棺の移動



石棺の移動



石棺の移動

図版十

石棺の移動



石棺の移動



石棺の移動



石棺の保存作業完了



石棺の保存作業完了

図版十二 石棺覆屋の建築

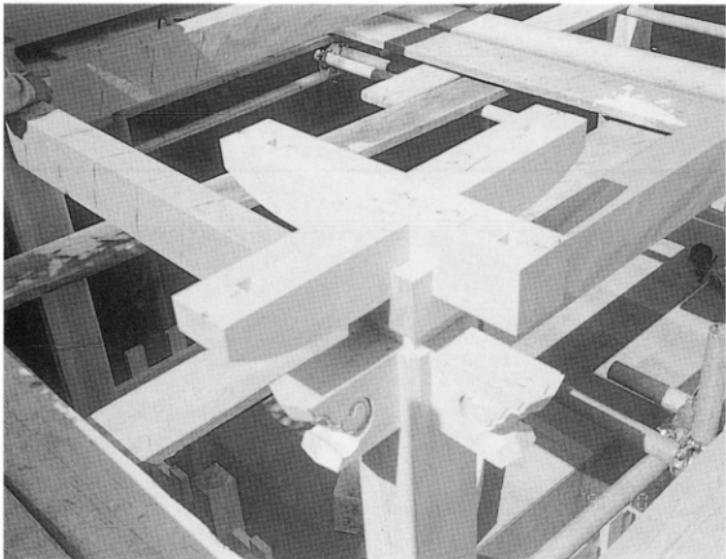


覆屋の礎石敷設



覆屋の礎石敷設

図版十三 石棺覆屋の建築



覆屋の建築斗供部分



覆屋の建築棟持部分

図版十四

石棺覆屋の建築



覆屋の建築銅板張り



覆屋の建築銅板張り

図版十五 石棺覆屋の建築

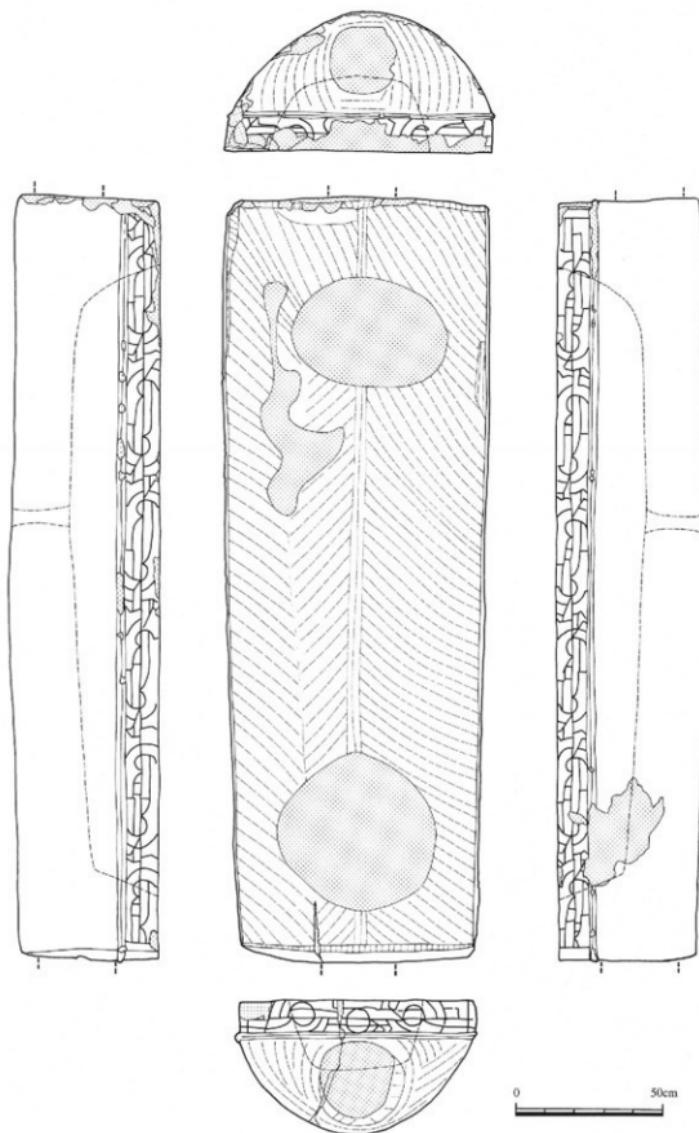


覆屋の建築連子骨



覆屋の完成披露

図版十六 石棺蓋の実測図



報 告 書 抄 錄

ふりがな	じゅうようぶんかざいあんぶくじせつかんほぞんせいびじょうほうこく
書 名	重要文化財安福寺石棺保存整備事業報告
副 書 名	
卷 次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	1996-Ⅲ
編 著 者 名	北野 重
編 集 機 関	柏原市教育委員会
所 在 地	〒582 大阪府柏原市安堂町1-43 TEL 0729-72-1501
発 行 年 月 日	西暦 1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
玉手山古墳 群	柏原市玉手町	27221		34度 33分 45秒	135度 38分 0秒			石棺の保存整備

所収遺跡名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
玉手山古墳 群	古 墓	古墳時代		割竹形石棺	直弧文

**重要文化財安福寺石棺保存
整備事業報告**

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501内線5133
発行年月日 平成8年3月31日
印 刷 徳近哉印刷センター

